

【市民活動賞】 第25回 日本水大賞

豊かな海を取戻すため 100年後の奈佐の浜 漂着ゴミゼロに

22世紀奈佐の浜プロジェクト委員会 近藤 朗

はじめに

伊勢湾における海岸漂着ゴミ、とりわけプラスチックゴミの問題は極めて深刻な状況になっており、環境省及び三重県が2007年～2010年にかけて実施した調査では、伊勢湾流域（愛知・岐阜・三重県）を発生源として流下するゴミは年々増え続け、年間1万2千トンに及び、その半分ほどが三重県鳥羽市へ、そして答志島へと流れ着くことが報告されています。

この事実は当時、実は私自身もあまり認識していませんでしたが、2011年12月に三重県水産部局経由で答志島桃取地区の漁師さんからのSOSがあると知らされ、愛知・岐阜・三重の仲間達と共に現地を見に行ったところ、ゴミにまみれた奈佐の浜海岸の凄まじい惨状に圧倒され、直ちにこの現状を伊勢湾流域圏全体に知らせるべく、「22世紀奈佐の浜プロジェクト」を立ち上げました。



答志島奈佐の浜の惨状

現地を見てからプロジェクト設立までは、僅か3か月ほど、これが可能だったのは、経緯があったからです。2010年に愛知・名古屋において第10回生物多様性条約締約国会議(CBD/COP10)が開催されるにあたって、私がかかわっていたNGO生物多様性フォーラム(JFB)が環境省(中部事務所)と連携し、3年ほどかけて伊勢湾流域圏内の環境保全活動80団体を調査して

おり、既にこのネットワークが出来ていたためです。私たちは、2012年1月から3月にかけて、愛知・岐阜・三重県を巡り様々な場での呼びかけを行い、4月1日には委員会を設立。結果としてプロジェクトに参加した3県の市民団体は50以上に及びました。また、CBD/COP10、JFBでの活動には多くの学生たちも関わっていたため、奈佐の浜プロジェクトには設立当初から、学生たちも多数参加していたのが大きな特徴です。

伊勢・三河湾流域の保全・再生に向けて Working Toward Conservation and Restoration of Biodiversity in Ise Mikawa Bay Watershed



環境省中部地方環境事務所
Chubu Regional Environment Office, Ministry of the Environment, Japan
環境省
Ministry of the Environment

2010年 CBD/COP10で配布された環境省パンフレット

奈佐の浜プロジェクトのポリシー

～ ゴミを拾い続けるだけでは、何も解決しない

プロジェクト展開にあたって、私たちは以下の目標設定をしました(2012年4月時点)。

- 5年後に奈佐の浜の漂着ごみの3分の1減
- 10年後に奈佐の浜の漂着ゴミの半減
- 100年後(22世紀)の奈佐の浜の漂着ゴミゼロに

～ 奈佐の浜に 伊勢湾に 豊かな海を取り戻そう ～

毎年奈佐の浜のゴミを拾い続けることだけで、これが達成できるでしょうか？どれだけ拾い続けても、台風などが来る度に元の本木阿弥となり、空しい作業となります。すなわち発生源対策が不可欠であり、これをまず念頭に置きました。

上流域の都市などに暮らしていると、目の前のごみはいつの間にか見えなくなり、深く意識することはありません。私自身が答志島・奈佐の浜海岸の惨状を見てショックを受けたように、まず伊勢湾流域圏に暮らす人々がこの現実を知ることから始めなければならないと考えました。

そこで、3県の市民へと呼びかけ答志島に来てもらい、現状を知り、かつ海岸清掃をしようというのが最初の取り組みでした。結果として初年度2012年は2回の視察・海岸清掃を行い、合わせて実に800名もの参加者が集まりました。2013年からは、春に伊勢湾流域圏（愛知・岐阜・三重）の山からまち、海へのエクスカージョンを実施し、これによる学び・交流・広報活動も展開、2019年までに9回の答志島海岸清掃と7回の流域エクスカージョン実施により、延べ4,000名の市民が伊勢

湾の現状を知ることになるのです。なお、このプロジェクト展開には、市民活動のみならず、三重県庁を事務局とする行政の「伊勢湾総合対策協議会 海岸漂着物対策検討会（三重県・愛知県・岐阜県・名古屋市）」とも連携を図ってきました。これは、プロジェクト発足の同時期に当時の三重県知事が3県1市へと、この問題のSOSを発信したことによります。



愛知県渥美半島西の浜海岸清掃（2014年6月15日）

22世紀奈佐の浜プロジェクトの活動

年	活動内容	参加者
2012	春の奈佐の浜海岸清掃（第1回） 秋の奈佐の浜・安楽島海岸清掃	300名 500名
2013	長良川エクスカージョン（岐阜県郡上市） 答志島奈佐の浜海岸清掃	150名 300名
2014	西の浜海岸清掃（愛知県田原市） 答志島奈佐の浜海岸清掃&学生交流会 スタート	300名 300名
2015	三杉なあなあエクスカージョン （三重・津市） 答志島奈佐の浜海岸清掃	250名 300名
2016	市民の伊勢志摩サミット提言 揖斐川エクスカージョン（岐阜・徳山ダム） 第14回全国海ごみサミット・三重会議& 答志島奈佐の浜海岸清掃「鳥羽アピール」	150名 360名
2017	藤前干潟エクスカージョン 答志島奈佐の浜海岸清掃	180名 200名
2018	吉崎海岸清掃・学習会（三重・四日市市） 答志島奈佐の浜海岸清掃 学生会設立	250名 200名
2019	長良川エクスカージョン（岐阜県岐阜市） 答志島奈佐の浜海岸清掃	100名 170名
2020 ～ 2021	コロナ禍での新たな活動展開を模索 ～学生会／伊勢湾流域圏、全国での活躍 2021.10／26 長良西小・鳥羽小OL交流会	
2022	答志島奈佐の浜海岸清掃&学生会合宿 長良西小・鳥羽小交流会（三重・四日市市）	120名 160名
計		4300名

さらなる広がり求めて

～ JEAN、全国川ごみネットワークなどとの連携

多くの参加者を得て展開してきたプロジェクトなのですが、伊勢湾流域圏は海域・流入する陸域を併せると2万km²に及ぶ面積を有し、人口は1千万人を超える広大な範囲であり、まだまだ十分とは言えません。

海岸清掃、エクスカージョン開催時には、同時に学習会やシンポジウム、交流会なども実施しており、参加者から周囲の方々への広報もお願いしていますが、さらに積極的に広報を行い、ゴミの発生源対策にまで踏み込む必要があると感じていたため、さらなる広域連携を求めていきました。

2015年、東北で開催された第8回「いい川・いい川づくりワークショップ」に参加した際、川・海ゴミ問題に関わる一般社団法人JEANの金子博氏、荒川クリーンエイドフォーラムの伊藤浩子氏等と話をすることがあり、彼らが「全国川ごみネットワーク」を設立（2015年1月）、これに奈佐の浜プロジェクトとして2016年より合流することとします。これにより「川ごみサミット」などを通じて、環境省や国交省とも繋がりを持つこと、発生源対策としての広報ツールを作成し活用を図るなど飛躍的に活動が広がりました。



2019.11.9 川ごみサミット・とくしまで「奈佐の浜」発表

伝えるのはあなた
未来のために
知っておきたい 川ごみの話
～川ごみ学習 ポイントブック～



全国川ごみネットワーク作成「川ごみ学習ポイントブック」2022年

JEANとの連携により2016年10月、「第14回全国海ごみサミット2016 三重会議」も伊勢市・鳥羽市（答志島）で開催しました。三重県知事も参加の元、伊勢湾を始めとする豊かな海の再生をめざし、北太平洋地域の連携に向けた「鳥羽アピール」を採択したのです。



世界中・全国から奈佐の浜に集まった人びと（2016年10月30日）

世代も超えた学生・若者たちの躍動

～ コロナ禍でも止めなかった活動展開

伊勢湾のゴミを100年後ゼロにするという目標を掲げていたため、世代継承・世代間共有は私たちの大きなテーマでした。当初から多くの学生たちの参加があったものの、彼らは更に主体的な役割を担うべきであろうと、2014年秋の清掃会・シンポジウムより学生交流会をスタートさせたのです。



学生交流会の様子（上）2015年答志島（下）2016年徳山ダム

学生たちの活動は、やはり卒業・就職という節目で一旦途切れることが常であり、私たちは彼らをその内芽が出て来るであろう「シードバンク」として捉えていましたが、交流会の引っ張った学生たちの中には、直ちに地域で活躍する者も出

てきました。交流会設立時を担った三重大学・下田菜生さんは、卒業後20代でプロジェクト三重県代表委員、四日市ウミガメ保存会の代表となり活躍されていますし、同じく岐阜大学サークルESDクオリア・見屋井一輝さんは、2023年に岐阜県代表委員を担うことになりました。

学生交流会は、2018年にプロジェクト学生部会として主体的活動組織へと改組し、地域の未来・志援セン

ターと協働し「未来創造プログラム」を展開、全国へと発信活動を進めることとなりました。まず、2018年に「第11回いい川・いい川づくり ワークショップin北海道・十勝大会」での広報活動を行い、準グランプリ、翌2019年の同京都・滋賀大会でも小浦嘉門代表が「広松伝賞」を受賞、さらにこのワークショップを中部で開催するようアピールし、全国の共感を得たところです(下記写真)。



この中部大会を2020年開催すべく準備していたところ勃発したのが、新型コロナウイルス感染拡大のパンデミックであり、私たちと学生部会はこれと向き合うこととなりました。例えコロナ禍であろうと、伊勢湾の問題は待たなしであり、今の出来るやり方で全国へ発信していこうと決意し、オンラインの活用を模索、2020年12月に名古屋堀川を発信基地として全国ワークショップ「ゆく川 くる川 川談義」を開催、翌年2021年には岐阜市長良川河畔を拠点として「第13回いい川・いい川づくりワークショップ中部大会 in 長良川」を展開しました。これにより奈佐の浜プロジェクトは、さらに全国へと課題を発信することが出来ました。



ワークショップ中部大会の舞台となった長良川国際会議場にて



2020年12月27日 ゆく川 くる川 川談義 ～堀川にて



2021年10月2日 いい川・いい川づくりワークショップ長良川にて

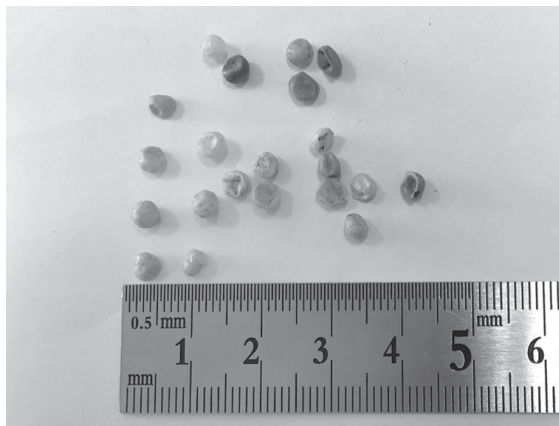
これからの新たな展開を目指して

～ 2022年 奈佐の浜海岸清掃の再開、
そして新たな課題への挑戦

2022年10月、3年ぶりの答志島海岸清掃実施(120名参加)と共に、初の試みである学生合宿も一泊2日を実施しました。これには学生部会OBも参加し、新たな継続性の可能性を示してくれました。同月、前年度はオンラインで開催した岐阜市長良西小学校と三重県小学校との交流会も四日市市で開催し、現場を体感する

ことの重要性も実感したところです。しかしながら未だ伊勢湾の課題は、ゴミ問題を始め何ら解決されていないというのが現状です。私たちは更に、何を目指していくべきでしょうか？

2022年3月19日、日本河川協会（主催）と愛知・川の会の共催により、第208回「河川文化を語る会」が開催され、私たちはこの議論を行いました。プロジェクト開始後10年を経て、漂着ゴミが減少している実感はあるものの、当初目標としていた半減には至っていない。とりわけ回収できないマイクロプラスチックの問題は深刻であり、当プロジェクトメンバーである四日市大学学生たちの調査では、1平方メートル当たり換算で6万個のプラスチック片が確認されたといえます。



水稲に利用される肥料カプセル

プラスチックゴミ対策は、環境に放出されてからでは遅いのだということが分かります。私たちは当初設定した100年後ゴミゼロ目標の見直しが必要だと強く認識しました。

まず、プラスチックについては100年先の22世紀までという悠長なことは言っていられないということ。次に、ゴミゼロの目標については、生活系プラスチックゴミと流木などの自然物については分けて考えるべきであろうということ。プラスチックゴミは緊急に必ずゼロにしなければなりませんし、このことを流域市民が全て危機感を持つべきでしょう。

しかしながら流木・灌木などの自然流下物については、別な視点が必要となってきます。当初漁師さんからのSOSは、むしろこちらの方であり無視はできない課題なのですが、これは流域圏全体における森林管理のあり方や土砂災害対策、さらにはかつてはこれらを許容していた自然空間（砂浜・干潟・藻場等）の喪失といった問題でもあり、総合的な流域圏再生に向けてチャレンジしていきたいと考えており、誰もが目をそらしてはいけない課題でしょう。私たちがこれからも豊かな伊勢湾の恵みを楽しんでいくために。



答志島合宿での伊勢湾の恵み

22世紀奈佐の浜プロジェクト委員会 近藤 朗